

# インサイド・マン

2006(平成18)年8月5日鑑賞(ホクテンザ2)

★★★★



監督＝スパイク・リー／脚本＝ラッセル・ジェウィルス／製作＝ブライアン・グレイザー／製作総指揮＝ダニエル・M・ローゼンバーグ、ジョン・キルク／カレン・ケヘラ・シャウウッド、キム・ロス／出演＝デンゼル・ワシントン／クライブ・オーウェン／ジョディ・フォスター／クリストファー・プラマー／ウィレム・デフォー／キウエテル・イジヨフォー (UIP 配給／2006年アメリカ映画／128分)

……タイトルからは何の映画かわからないが、この映画は銀行強盗の完全犯罪を描くもの……。犯人たちの工夫の第1は、人質にとった約50名の職員と顧客全員に犯人と同じ服装をさせること。これによって犯人と人質は完全に一体化し、人質はたちまち共犯者に……。この映画の紹介はこれだけで十分だろう。すばらしい脚本にもとづく完全犯罪の楽しさと快感(?)をあなたもタップリと味わえること確実。もっともそれは、映画の中だけの話に。この映画をヒントにして、新聞紙上を賑わすような犯罪を起こしてはダメよ……。『DEATH NOTE』に熱中するゲーム感覚の若者たちが増えている今、念のために……。

## ハラハラドキドキ、これはすごい！

映画の冒頭、大写しになったダルトン・ラッセル(クライブ・オーウェン)の顔が登場し、自信タップリに「私はダルトン・ラッセル。2度と繰り返さないからよく聞け。私は銀行を襲う完全犯罪を計画し、そして、実行する」と述べる。

これによって、『インサイド・マン』というタイトルからは何の物語なのかサッパリわからないこの映画が、「犯罪モノ」だということがはじめてわかる。そして、その後の映画の展開は、ハラハラドキドキの連続。これはすごい映画だよ……。

## 何とも手際よい銀行強盗たち……

襲われるのは、ニューヨークのマンハッタンにあるマンハッタン信託銀行。そしてこれを襲うのは、「パーフェクト塗装サービス」のバンに乗り、ジャンプスーツをきた数名の男たち……？ 帽子を被り、濃いサングラスをかけ、マスクで顔を完全に覆った犯人たちは、突然銃を乱射し、「全員床に伏せろ！」と命令したうえ、「これから我々は、この銀行から多額の金を引き出す」と宣言した。そして、彼らは実に手際よく、「人質作戦」と「籠城作戦」を実行。そして、玄関をシャットアウトした後、外にいた警察官にリーダーのダルトンが告げたのは、外国なまりでの「人質取った。近づいたら、人質殺す」というセリフ。さあ、これからここでどんな攻防戦が……？

## 人質交渉人は……？

アメリカには「人質交渉人」という専門のジャンルがあることを私がはじめて知ったのは、『交渉人』(98年)から。そして、その日本版が『交渉人 真下正義』(05年)だった(『シネマルーム7』369頁参照)。この映画では明確に人質交渉人と位置づけられていないが、私がそれだと理解するのは、NY市警のキース・フレイジャー(デンゼル・ワシントン)とビル・ミッチェル(キウエテル・イジョフォー)の2人のチーム。フレイジャーは14万ドルの小切手が紛失するという事件に巻き込まれたため、目下内務調査課から汚職の疑いをかけられている身だったから、「汚名返上のチャンス」とばかり、勇んで現場に駆けつけ、以降犯人たちとの交渉に当たったが……。

## なるほど、犯人たちの狙いは合理的！

人質を取り、籠城することはある意味簡単だが、難しいのは要求達成までそれを維持していくこと。さらに難しいのが、要求達成後、犯人たちが無事現場から逃れること。そういう困難性を考えれば、銀行強盗の完全犯罪というのは本来ありえない話だが、ダルトンはそれを自信タツプりに宣言し、見事に実行してしまったから、そりゃ大したもの……。

この映画が最高に面白いのは、その完全犯罪ぶりだが、そのための1つの知恵が、人質を全員犯人たちと同じジャンプスーツ姿にさせ、顔も帽子とサングラスとマスクで完全に覆わせたこと。こうなると、仮に武力突入しても、50名程いる人質と4人の犯人グループとの見分けが全然つかないから、無用な混乱や犠牲者が出ることは確実……。なるほど、犯人たちの狙いは合理的。

このように感心している間にも、差し入れさせた食料品の中に盗聴器が仕掛けられていることを見込んで、逆にアルバニア語のテープを流したり、人質の首に要求を書いたボードをぶら下げて外に出したりと、犯人たちの動きは変幻自在。こんな多方面にわたる陽動作戦(?)に対して、プレイヤーたちは正確に対応できるのだろうか……?

## 何やら怪しげ、会長さんと女性弁護士……?

この映画には、あの『サウンド・オブ・ミュージック』(64年)でトラップ大佐を演じたクリストファー・プラマーが、マンハッタン信託銀行の会長アーサー・ケイスとして登場する。そんな会長のところへ馳せ参ずるのは、ニューヨークでも指折りの有能な女性弁護士、マデリーン・ホワイト(ジョディ・フォスター)。この会長にとっては、銀行内の大金庫に保管されているお金(札束)よりも、1つの貸し金庫の方が重大らしい……。しかし、それは物語の進行上からは容易にわからず、ミステリー状態のままだが、このアーサー会長が何やら怪しげなことはたしか。さて、この貸し金庫の中には一体何が……?

さらに、このアーサー会長の依頼を受けて動くマデリーン弁護士は常に自信タツプリ。そして、このマデリーン弁護士は、何とニューヨーク市長とともに事件現場に登場。何やら政治レベルの問題をチラつかせながら、遂に単身銀行の中に入り込み、直接ダルトンと交渉するまでに。そこで彼女が言うセリフは、「依頼者のある利益を守るため、あなたたちの要求をのむことにする」というものだが、さてそんな交渉の行方は……?

## フレイジャーとダルトンとの交渉は決裂!

ダルトンの要求は、「ケネディ空港にジャンボ機を用意しろ」ということから

始まった。当然フレイジャーたちは、それに対して細心の注意を払いながら知恵をめぐらしていったが、常に冷静で自信タツプリな犯人たちの対応に少し当惑気味……？ 人質を取って立て籠もった犯人たちと人質交渉人との間の「交渉」は、知能ゲームの最たるものだが、この映画のそれはその意味でも見どころがいっぱい。

そして、遂にある日、フレイジャー自身が銀行の中に入って、ダルトンと交渉することになったが、そこではフレイジャーのある挑発作戦が……。その狙いや結果、そしてそれがその後の展開にどのように影響してくるのか等々について、ここに書くことができないのは当然。それについては、あなた自身がしっかりとスクリーンを観て、タツプリと楽しんでもらいたいもの……。

### 人質「射殺」を境に事態は急変！

事件発生以来、既に数日が経過しているはずだが、交渉は一向にまとまる気配を見せず、一進一退を続けていた。しかし、遂に要求が受け入れられないことにしびれを切らした(?) 犯人たちは、わざわざモニターに映せと伝えたうえ、人質の1人を射殺！ 遂に第1号の犠牲者が出てしまったことによってたちまち事態は急変。それまで「人質交渉人」の役目を何とか果たしていたフレイジャーたちは交代させられたうえ、遂に警察官の武力突入が決断されたのだった。

犯人が4人グループであることは、既に各種情報の分析によって調査済み。したがって、問題は銀行内に突入した後、銃を持った犯人たちをいかに特定するかということだが……。練りに練った作戦にもとづいて「いざ突入！」と同時に、銀行の入口から次々と飛び出してきたのは、何と、ジャンプスーツ姿で覆面をしたたくさんの人たち。さあ、この混乱の中で、武装警察官たちはどう対応するの……？ そして、犯人たちは……？

### 脚本のすばらしさに感嘆！

この映画の行方については、これ以上書くことを遠慮しておこう。なぜなら、それがこの映画のスパイク・リー監督や脚本を書いたラッセル・ジェウィルスに対する礼儀だと思うから。スパイク・リーは、『マルコム X』(92年)のすばらしさで印象に残った監督だが、パンフレットによれば、そのスパイク・リーや製作

のブライアン・グレイザーが惚れ込んでしまったのが、新人脚本家のラッセル・ジェウィルスの書いた脚本とのこと。脚本の出来が映画の出来に占める割合は相当なものだし、監督が意欲を持って映画製作に取り組めるのかどうかも、脚本の良し悪しによるところが大。

警察官突入というクライマックスの場面以降、この映画がどのように展開していくのか……？ そして、ダルトンが言うところの銀行強盗の完全犯罪は、本当に実現するのか……？

そのアツと驚く展開の数々を、あなたにも固唾を呑んで見守っていただきたいものだ。それと同時に頭に入れておいてもらいたいのは、それを生み出した第1の功労者は脚本のラッセル・ジェウィルスだということ。さあ、完全犯罪の楽しさと快感(?)を心ゆくまで楽しもう。

2006(平成18)年8月7日記

#### ミニコラム

### 新人弁護士は映画から交渉術を学ぶべし！

06年5月に初の新司法試験が実施され、48.3%という合格率が全国の法科大学院や受験生に大きな波紋を投げかけた。私たちの時代の司法試験合格者は年間500名弱だったが、それが今約1600名になり、2010年には約3000名となる。こんな弁護士急増時代の中、司法修習生の就職難や依頼者の金を使い込む悪徳弁護士の急増が現実のものとなり、今や「食えない弁護士」の大量発生という可能性までも？ さてそんな中、書くこととしゃべることを2本柱とする新人弁護士の能力は？

映画を観れば法廷モノ、刑事モノ、

スパイモノにおける「交渉術」の重要性は明らか。交渉術のない者は恋愛モノにおいても恋の敗者と相場は決まっている？ ところが日本では「交渉術」の価値が低いため、法科大学院でもそれを教える授業はマレ。しかして今や書けない、しゃべれない新人弁護士だらけだから、交渉術を備えた新人弁護士などは夢のまた夢？ そう断じてしまえば身も蓋もないが、法科大学院の授業では、映画から弁護士に不可欠な交渉術を教える必要があるのでは……。

2006(平成18)年11月22日記